

第15回 日能研

文学コンクール

優秀賞

【創作文】early city

京都市立西京高等学校・二年

高田 悠生さん

作品に対する思い・感想

この度は私の作品である『early city』を優秀賞として評価していただけたことを、大変嬉しく思います。

今回は人間の光と闇の部分を表現しようと思い、特に闇の部分はどうやってリアルに表現しようかと考えました。自分の中の本音や、見え隠れする悪意を拾いました。とても苦しい作業でした。

でも書き上げた後は、なぜか清々しい気持ちになりました。読んで下さる方にも、そういった読後感を味わっていただければ幸いです。

それは県立高校の真正面にある雑貨店。店の入口横には年季の入った業務用アイス冷凍庫が、現役で客を迎え入れる。その中は霜で覆われていて、容量の半分ほどしか商品が入らない。入口を挟んで反対側には、客自身が出し入れできる飲料水の縦長冷蔵庫が置かれている。ビン入り牛乳や、子供用の小さな紙パックジュースも用意されていて、店の前を通れば年齢問わず、客はその店に吸い寄せられていく。一歩足を踏み入れると、ふつとどこからともなく漂ってくる甘い香り。駄菓子や文房具の独特の匂いが、木造の古い店内の中で中和され、人はそれを落ち着く匂いだと表現する。昔ながらの何でも屋。コンビニがこれほどまでに街にあふれる現代よりずっと前から、近隣住民の多種多様な要望に応えてきた店。

通称『フジイさん』学校指定の体操服なども扱い、学祭シーズンともなれば、必要な備品がこの店で手に入るとあって、向いの県立高校の生徒達で店はあふれかえる。洗剤やシャンプーなどの日用品も一通りそろっていて、店内に見当たらなくても店主に一声「これ、ないの？」と聞けば、大概のモノは奥から出てくる。以前は親子三人でやっていたその店も、年老いた女主人一人で今はやっている。広い店内を持って余しているのか、店の半分にいたっては、ある年代で時間が止まっているように見えた。

昔はその店の主人がパン売り場を担当し、食パンなどは、その場で切り売りしていたため、隣の子供たちがおつかいに来ると「食パン6枚切お願いします」と、かわいい声を響かせていた。店内で作られていた自家製のサンドイッチは、種類も多く新鮮で店の人気商品であった。若息子は少し人見知りなのか、客と話すことはほとんどなかったが、商品の納入や店のきり盛りをしていたようだった。女主人は、店先でよく子供達の話し相手になっていた。なんでも出てくる店の奥の日用品担当で、どんな要望にもいつでも応えるので、客の間では『なんでもおばちゃん』と呼ばれるようになっていた。そんな『フジイさん』から、いつの間にか若息子がいなくなり、店に活気がなくなってしまった。しかしながら夫婦二人細々と、毎日その店は客を迎え入れた。

主人が亡くなってからの店内は、おばちゃんが座るレジ回りを含む店の半分しか電気が点いておらず、左半分は真っ暗であった。その暗闇の中の壁には、一昔前のアイドルや女優の、ケバケバしい笑顔のポスターが貼られていて、なんだか不気味でもあった。棚には、大きめの百科事典ぐらいの大きさのカラフルな箱（以前はカラフルだったと思われる）に入った、古い洗濯用粉洗剤がオブジェのようにたくさん並べられていた。洗面器や、多くの日用品、文房具の入った什器などは、何年か分のホコリをざっくりかぶり、もう絶対に売りモノではないと思われた。そして一番奥の壁には達筆な字で『習字教えます』『筆耕、承ります』などと書かれた半紙が、はがれかけた状態でなんとかそこに留まっていた。

店内で電気の点いている方の一番奥に、店主の『なんでもおばちゃん』が座るレジ台兼、テーブルがあった。その上には、小さなテレビが飾り物のように置かれていた。毎日、民営放送にチャンネルはロックされており、その音声が店のBGM代わりになっていた。今日もテレビから、全国のニュース&お天気について、ローカルニュースが流れたのだった。

「11月10日、今朝9時20分頃、県立泉川高校一年の早川エミルさん16歳が、ショッピングモール『プラザ泉川』の屋上から転落。病院に運ばれましたが間もなく死亡が確認されました。警察は、事故、自殺の両面の可能性を視野に入れ、現場検証と並行し、家族や学校関係者から事情を聴く方針です。続いては…。」

いつもはおばちゃんの横で、存在感無くついているそのテレビなど、気にもとめていなかった長門は思わず息を飲んだ。今日は半休でお昼からの出勤。しかし習慣で早めに職場に足が向き、昼食用のパンを買いに『フジイさん』に寄ったのだ。だが、そのニュースを聞いてからしばらくは体が固まってしまい、動けなくなってしまう。みるみる顔色が変わっていった長門。彼のスマホが、その均衡を破るかのように静かに声をあげた。長門は我に返ってその電話をとった。

「はい。実はもう近くまで来ています。すぐに向かいます」

ほんの数分でその会話を終わらせると、手に持っていたパンの会計を…:と思い、おばちゃんにゆっくりとただ自動的に手渡した。

「長門先生、大丈夫かい？」

いつもとは違う様子に、店主のおばちゃんが気遣って声をかけたが、長門は店内の暗闇側の壁を、無機質な表情のまま、遠い目でずっと見つめるばかりだった。

早川咲江には自慢の娘がいた。幼少のころからその愛くるしさで、連れ立って一步町を歩けば、「今の女の子、可愛くなかった…?」

「めちやくちや可愛かったよ！」

と、どこからともなくそんな声が聞こえてくるほどに、目をひく少女であった。実際、○○プロダクションという、本当に存在するかどうかは別にして、芸能プロダクションや養成所のスカウトだと名乗る人物から、母親の咲江に名刺を渡されたことが何度もあった。あの可愛いエミルちゃんのお母さん…:という代名詞が、いつしか彼女の名刺代わりとなった。

咲江は一流商社に勤める夫と若くに結婚し、何不自由のない生活をしていた。咲江一家が暮らす一軒家は、洋風なその造りと凝ったたたずまいが噂となり、インテリア雑誌に取材され、掲載されたこともあった。可愛い娘にも恵まれ、都会の一等地で素敵な家で優雅に暮らす彼女を人は羨んだ。

しかし咲江の心は時に悲鳴をあげていた。遠くに住む義理の母から強く望まれた、男児を授かることができなかつたことは、彼女を長く苦しめていた。ある日、まだ小さかつた孫の Emil に向かつて義母は「かわいいわねえ。あなたが男の子だったら、もっとかわいかつたのにねえ。ママは Emil ちゃんに、かわいい弟くんを産んでくれるかしらねえ」と呟くのだった。自分は早川家の長男の嫁としてまだ認められていないことを知った咲江。だが夫の仕事は多忙を極め、夫婦で過ごす時間はほとんど持てずにいた。咲江は自分の思いを夫に話せないまま Emil の育児に追われる毎日を過ごしていた。

Emil が小学校に入学する頃、夫は会社で大きなプロジェクトを任せられ、海外への単身赴任となった。本当は咲江も一緒にいく気持ちでいたのだが、赴任先が発展途上国ということもあり、Emil の教育環境を考え、夫もそれを望んだため日本に残ることにした。広い家の中に娘と二人きり。心細くないと言えは嘘になる。それでも咲江には愛する娘 Emil：この子を立派に育て上げることこそが、自分の使命であり、幸せだと思ふようになっていった。

娘の Emil は、幼稚園こそ夫の実家に切望され、それなりの所に通っていたが、小学校は地元の公立学校に通っていた。それは、幼稚園からエスカレーター式に上がっていく学校の中では、Emil は狭い世界だけしか知らないただのお嬢様になってしまふことを咲江が嫌つたからだ。義母からの猛反対にあつたが、咲江はもう、義母の意見に左右される弱い母親ではなくなつていた。強い思いをもつて Emil の教育に自分の信念を貫いていた咲江。Emil が何事においても一番であること。優秀であること。完璧であること。そして容姿端麗であることを求めるようになった。Emil 自身もそのことになんの疑いを持たず、母親と二人三脚で何事にも前向きに頑張る素直な子供に育つていた。

「ねえ、お母さん。今日のテスト 85 点だった：」

Emil が少し表情を曇らせ母の咲江に報告した。

「えっ？ どうして？ Emil ちゃんは学校のテストは全部 100 点とるつて言つていたよね？」

表情は穏やかだが、声のトーンは低い咲江。

「ごめんなさい。答えは分かつていたんだけど、記号を選ぶ時に間違つてしまつたの」

その温度を感じた Emil が、目線を外して言い訳をした。

「どうして、そんなことになるの？ 100 点をとるために、いっぱいお勉強したよね？ それなのに、そんな結果になつて悔しくないの？ 何もお勉強をしていないお友達に負けて悔しくないの？」

咲江は Emil が外した目線を無理やり合わせ直し、語尾を強めた。

「そうだよね。悔しいよ。だつていつも遊んでばかりいる、みっちゃんと同じ点だった」

Emil は母親の言葉に同調した。

「これからは、こんなことがないようにする。こんな悔しい思いをしたくないしね。」

「エミルは100点とるために毎日プリント頑張っているんだもん。これからは100点以外絶対とらない！お母さんに約束する！」

エミルはそんな生活が決して苦痛ではなかった。なぜなら自分が努力をし、その対価として母親から向けられるまなざしは、何物にも代えがたいご褒美に感じていたからだ。エミルに物欲はなかった。ただ、母親からの「頑張ったね」「偉かったね」「すごいね」の言葉が一番欲しかったし嬉しかった。咲江が自分と一緒に毎日問題プリントを解き、寄り添って応援してくれていることも、一緒に答え合わせしてくれることも、漢字の練習ノートも同じものを一緒にやってくれることも、どれもが母親から向けられた愛情だと信じていた。

そのため、咲江の望む自分であることが自分にとって一番幸せなことだと疑わずに努力し続けていた。そして次第にエミルは、いい結果を出せない自分に対し、怒りの感情を咲江からぶつけられても、それは咲江の思いに応えられない自分が悪いのだと、尚一層努力を重ねた。これだけをとってみれば歪んだ親子関係にも思えるが、それは違っていた。エミルにとって咲江は、体全部を使って、思いつきり愛情表現をしてくれる優しい母親。父親がほとんど不在の中で、子供ながらに自分がどれほど母親から愛されているのかを感じるには余りあるものであった。

しかも、勉強だけを推し進められたわけではなかった。中学受験だといって、回りの友達が進学塾に通い始めた時も、勉強は学校と家だけで充分だと母は言ってくれた。だから、放課後も毎日最後までグラウンドに残って遊ぶことができたし、ピアノもダンスもずっと習い事は続けさせてくれた。(塾通いのお友達は皆辞めさせられていたから優越感もあった。)エミルの好奇心を揺さぶるもの全てに咲江は一緒に興味を持ち、休日はそれらを探求するために行動を共にした。そしてその時間をとても大切にした。二人は一心同体だった。

小学校での個別懇談の時に、あるものを担任教諭から咲江は見せられた。成績表でも、テスト結果でもない。「エミルちゃんには内緒ですが…」と差し出されたのは、道徳の時間の質問プリントだった。

「どうしても、お母さんに見てほしくて…」

少し誇らしげにそのプリントを机にゆつくりと置いた担任教諭。

「たいがいの子供たちはこの質問に、ゲームとか書くのですが…」

そう前置きをした担任教諭は笑った。そして彼女が指さす先にはこう書かれていた。

『あなたにとって、たかものは何ですか』

その質問にエミルは大きくはつきりした文字で

『お母さん』と答えていた。

中学受験という大きなチャレンジも、どこか親子で楽しみながらの挑戦だった。最終的には一年間進学塾には通ったものの、俗にいう「お受験」という高圧的なものではなく、今まで培ってきた知識と経験の集大成として、挑んだものであった。咲江はどこかで

「 Emil のように素直な子供らしい子供が受からない学校なんて、こちらからお断りだ」

とまで言い切っていた。それほどまでに自分の娘の成長に自信を持ち、母親として今まで行ってきた教育が、正しいものであったと心の中で強く信じていた。この時が親子の絶頂期だった。

Emil が中高一貫校の付属中学に合格をした時から、少しずつその歯車が狂いだした。未だに単身赴任を続ける夫はもはや、父親と呼べるものではなかった。その為、順当に年頃の子供に訪れる思春期に Emil が差し掛かった時、咲江は大きく苦しんだ。そしてもう一つ大きな問題もあった。それは、自信の喪失であった。今まで学校やクラスで上位の成績だった生徒が進学校と呼ばれる学校に一齐に集まる。そうすれば必然的に一番ではなくなるという、初めての挫折を味わうことになるのだ。それは生徒本人にとっても大きな挫折でもあるが、問題は親がそれ以上に順応できないことであった。

「 どうして一番じゃないの？」

中学校で初めて行われた定期テストの結果を見て咲江は驚愕した。

「 えっ？お母さん、何を言っているの？15位のどこがいけないの？先生はこのテストで20位以内の生徒は胸を張ってよろしいって言っていたよ！」

Emil は、ギッと咲江の顔を睨みつけるように言葉を言い放った。学校という社会において、今の自分がどういう立ち位置なのかは、Emil 自身が一番よく分かっていた。

「 だって Emil ちゃん。あなた今まで10番より後ろになったことなかったでしょ？」

咲江は今まで見てきた景色とは違う場所に立つ娘の結果にうろたえ、何かの間違いではないかと、結果を何度も見るばかりで Emil の表情など見ていなかった。

「 お母さん分かってないよ！私が頑張らなかったんじゃないよ、皆がすご過ぎるんだよ！」

今まで口答えなどしたことなどなかった Emil の心からの声だった。母親の思いに応えられなくなった自分にも腹が立ったし、成績のことで怒ってばかりいる母親にもうんざりしていた。

ずっと二人で頑張ってきたことに自負がある咲江はショックを受けた。きっと、この進学校に合格したことに安心してしまい、今まで私がやってきた勉強の管理が甘くなったせいだ：と自分を責めた。Emil は Emil で、もちろん自分の結果には悔しい思いもしていた。が、それ以上に、今まで自分の周囲にはあまりいなかった、意識の高いクラスメイトに戸惑い、不安が増す自分の揺れる感情を、どこに向ければいいのか分からなくなっていた。分かっていたことは一つ。もうその相談相手は母親じゃない。それだけは確信していた。やがて二人の向いている方向に大きくズレが生じ始めた。

咲江は、娘のためだと自分に言い聞かせながらも、どこかで自分の自信を取り戻すために、今まで以上に Emil に関わるようになっていった。家庭学習の内容は全部母親の咲江がスケジュー

ルを組んだ。課題提出は完璧にするようにチェックを入れる。細かい確認テストも全て満点がとれるように…と復習問題を咲江自らが製作し、エミルに解かせた。定期テストに向けては、単語帳や必要な問題集は二度解くため、全てをコピー、もしくはもう一冊同じ問題集を用意し演習をさせた。

エミル自身も母親のそのやり方には不満があったものの、結果を出せた時の快感がまだ体に染み付いていたため、やめるにやめられず従っていた。気持ちのどこかで、早くいつもの上位という場所に戻りたい欲望にかられていたからだ。解決策をまだ自分で見出せていなかったその時期は、咲江の指示を無視する勇気がなかった。ただ、自分の意思に反した咲江の勉強の進め方。管理、監視されている自由のない生活。テストの結果に一喜一憂する母親の態度に、強い嫌悪感と違和感を徐々に覚え始めていた。

確かに咲江の指示通りやっていれば、おのずと結果は出た。そしていつしかエミルは学校の中で、生徒からだけではなく、先生からも一目置かれる存在になっていった。その時、またしても自分の教育に成果の出た咲江は有頂天になっていた。学校の授業参観に行けば

「お宅のエミルちゃん、すごいですねえ。噂は聞いていますよ…」

「いえいえ、うちの子なんてまだまだですよ…」

と、いう歯の浮くような寒い会話も、咲江を満足させた。しかし少しずつ大人に成長していたエミルにとって、そんな母親の存在が疎ましく思えてきたことに咲江は気が付いてはいなかった。今いる場所は、自分で手に入れた場所ではない。自分の意思はそこにはなく、全て母親から与えられたもの…。今のこの私は作られた自分。もうそんな自分を作り出すために頑張り続けるのはイヤ。そんな思いを強く胸に抱くようになっていった。

自分は何者なの？お母さんの操り人形なの？私は今の私を本当に望んでいるの？お母さんの心を満たすために私は生きているの？私は私じゃないの？じゃあ、本当の私って何？本当の私はいったい何がしたいの？

葛藤の中、それは反抗という形で現れた。

「もう勉強のことにはかかわらないで！」

「私は私のやり方で勉強をするから！」

「その結果も私自身のことだからお母さんには関係ない！」

「成績が良からうが悪からうが、いちいちお母さんに報告する義務もない！」

「もう、口出ししないで！」

エミルは今まで胸の中にしてしまっていた自分の思いを、はっきりと強い口調で咲江に伝えた。

「何を言っているの？今までお母さんと一緒に上手くやってきたじゃない？」

「まさか、自分の力だけで、ここまで来たと思っっているの？」

「自分一人じゃ何もできないくせに！」

「お母さんは、あなたのためだと思っつてここまで自分を犠牲にして頑張ってきたんでしょ！」

「親なのだから、口出しはするわよ！当り前じゃない！」

咲江は母親としてのプライドが傷つけられたことと、素直だったエミルが自分に歯向かうことが許せなかった。

交わるはずもない娘と母の思い。親から一步離れて、自分を自分で見つめ直すともがく、荒ぶる感情の娘。間違つた方向へ進むとうとする娘を、救いたい。そつちの道じゃないよと、正しい道を教えたい。まだまだ娘の感情を独占していたい子離れできない母親。もつれ合う感情は時に言葉が過ぎてしまうこともあった。

「うるさいんだよ！消えろ！死ね！」

「私の今までの人生を返してよ！」

「あんたが、母親じゃなかったら、私はもつと幸せだった！」

「あんたのせいで…あんたのせいで…」

今までに見たことのない形相で母親の自分を罵るエミルに対し、咲江はとっさに手が出てしまった。今まで幾度となく優しく撫でてきたその柔らかな頬を、たたいていた。その怒りの手はなかなか止まらない。何度も何度もエミルの愛くるしい頬をたたいたのだった。

「親に向かつてなんてこと言うの！お母さんはずっとエミルちゃんのことだけを思っつて一緒に頑張つてきたんじゃない！」

咲江は涙が止まらない…。エミルもぶたれた頬を手でおさえながら、目にいっぱい涙を浮かべながら、それでもなお続けた。

「うそばかり！全部自分のためじゃない！」

「自分が優越感を感じるためにエミルを利用しただけじゃない！」

「自慢の娘が欲しかつただけでしょ！お父さんやおばあちゃんに自分が褒めてもらいたかつただけでしょ！勉強ができて、なんでも完璧にできるロボットみたいな娘がほしかつただけでしょ！」

「エミルが欲しかつたわけじゃないじゃん！」

「偽善者！お母さんは偽善者だよ！」

そう言っつてエミルも大きく振り上げた手で母親の背中を何度も強くたたいた。

こうしてエミルの反抗期が続いたまま、高校への進学となつた。ある意味ここは助かつたと思つた咲江であつた。何故なら到底今の母娘の関係では、高校受験などを乗り越えられる状態ではなかつたからだ。折良く中高一貫校の付属中学に通つていたため、一応進学のためのテストはあるものの、よほどのことでない限りそのまま上の高校には入学できる。その高校も立派な進学校。これで心機一転、エミルは高校から、また前向きに素直に頑張つてくれるだろうと、意味のない自信が咲江の心を支えていた。これからまだまだ続く、本当の苦難を知りもしないで…。

高校生になったエミルは、人目をひく女性になっていた。色白の肌に、整った顔立ち。身長が165センチと高かったため、後ろ姿は一人前の大人だった。それでいて誰とでもきさくに話ができる性格は、男女問わず人気があった。いわゆる、よっている女子。カーストで言えばもちろんトップに君臨しているキラキラ女子だった。

「ねえ、エミルう。この前の古文のノート写させてよ〜」

エミルと一番仲のいい、これまたカースト上位の市川サツキだ。

「実は私もとつてないの…。次の授業ヤバイね。今、タカシにちよつとノート借りてくるわ」

タカシとは、エミルと付き合いだした二番目の彼氏だった。

「いいよなあ〜エミルには、天才タカシ君がいるもんなあ〜」

「何言ってるの。サツキだって幼馴染のユウスケ君がいるじゃん」

「あ〜。アレはダメダメ。サツカーばかりで、勉強じゃ使えな〜い」

タカシは学年で常に10位以内には入る学力の持ち主で、エミルとはお似合いのカップルとして、周りからは周知されていた。ユウスケは、サツカー部の控え選手であったが、明るい性格で幼馴染のサツキとは家族ぐるみの付き合いをしていた。

「そうだよ〜タカシはエミルに勉強を教えるために、毎日勉強しているんだよ〜」

「そうしたら、いつの間にか賢くなっちゃって…:すごくない?」

「これって、エミルのおかげじゃない?」

冗談ほく甘えた声でかわいく言ってみせたエミルだが、表情はなぜか緩んではない。

「ダメだよ〜タカシ君は、皆の先生なんだよ。サツキも教えてもらいたいもん。」

「ね〜エミル、一日でいいから、タカシ君貸してよ〜」

サツキも冗談の会話の続きのように調子を合わせているが、楽しそうな表情ではない。

窓際で数人の女子がいかにも内緒話だと言わんばかりに、皆に背を向けて落とした声のトーンで話をしていた。

「サツキちゃんをはじめ、タカシ君のこと好きだったんだよね…」

「そうそう。私サツキちゃんから聞いたもん。タカシ君の誕生日に告白しようと思っていたのに、エミルちゃんが先にタカシ君に告白してたって…」

「えー!エミルちゃん、サツキちゃんの気持ち知ってて、先に告白したの?」

「さすがにそれはないらしいんだけど…。でも、そんな偶然あるのかな?」

「そんなの、言っちゃ悪いけど、エミルちゃんに告白されて断る男子なんていないもんね」

「そりゃそうだよ…:めちゃくちや可愛いし」

「だからサツキちゃんも、仕方ないよ…:って言ってたけど…」

「でも、自分の好きだった人が、自分の一番仲のいい友達の彼氏だなんて地獄だよね…」

「地獄、地獄…」

そこにサツキが何話てるの〜？と、暇を持って余してやって来た。

「今ね、エミルさあ、タカシ君に古文のノートを三組まで借りに行ってるんだ」

「最悪だよね…三組からは6階だし、愛しの彼氏にすぐ会えないなんてね」

サツキは明るく笑顔で話しかけた。

「う、うん…」

ちよつとバツが悪く、話にくい窓際の女子グループ。

「なに〜？私の悪口〜？」

ちよつと小悪魔的な表情をしたサツキだったが、窓際の女子グループに自然に入り込む。

「じゃ、なくてさ…。サツキちゃん大丈夫なのかな…って」

窓際の女子グループの一人が、勇気をだしてサツキの本音を聞き出そうとした。

「何が、何が…？」

とぼけるサツキ。まだ小悪魔的な表情のままだ。

「タカシ君のこと…」

窓際の女子グループの女子がサツキの顔を下からのぞき込み、上目遣いでまた問いただす。

タカシ君…というワードを聞き、サツキの表情が豹変した。

「平気に見えてたのなら、上出来だわ。本当は私、エミルのことなんか許してないからさ」

とても冷たい表情に変わった。

「えっ!!」

窓際の女子グループの輪が一段と小さくなり、グツと力が入った。

「ここだけの話、エミルは可愛い顔してエグいことするよ」

サツキが軽く笑いながら大きな爆弾を落とした。

「タカシ君のことなんて、本当は好きなんかじゃなかったんだから…」

窓際の女子グループは、びっくりしすぎて息をすることも忘れていた。

「エミルは偶然、私がタカシ君のことを好きだっただけに気が付いて、私から取ったの」

サツキはまだ笑っている。でも冷たい表情は隠しきれしていない。

「自分が先に告白すれば、確実に落ちるって分かっているからね」

今度はサツキの表情が怒りに変わった。

「顔のいい女子で、性格のいい子なんていないからさ」

声を張り上げたサツキ。

「友達の人だっただけの付属品としか思っていないよ。自分をよく見せるための道具なんだよ」

後ろを気にしだす、窓際の女子グループ。

「じゃ、なんで、エミルちゃんと仲良くしているの？」

気にしながらも、核心をつく質問を小声で聞く。

「さあ、それは、これからのお楽しみ…」

そう言ってサツキは何事もなかったかのように自分の席に戻っていった。

ちよつとそこへ、タカシに借りたノートを手にしたエミルが帰ってきた。サツキは窓際の女子グループの皆に内緒だよ…と言わんばかりの視線を送った。そして、くるとエミルの方に振り返って「遅いよ〜エミルう〜。もう休憩時間終わっちゃうよ」と、微笑んだ。

五時間目の古文の授業が終わった後は、ホームルームの時間だった。担任の長門が声を張る。
「え〜と。今日は来月行われる球技大会のグループ決めだ！」

「サッカーとバレーボール。どちらかのグループに必ず所属すること！」

エミルは自分の席からサツキの方に振り返り、足でボールを蹴るふりをした。そしてニコツと笑い、目で合図を送った。サッカーと一緒に手を挙げようね〜。サツキも、手でオッケーサインを出し、頷いた。

「じゃ、最初に、女子バレーボール！まず希望から聞いていく！やりたい奴！」

何人かの女子が手を挙げた。先ほどの窓際の女子グループも示し合わせたように、同時に皆で手を挙げた。

「え〜つと、女子バレー、あと一人だな〜。あと一人、誰かやらないか〜？」

こういう時の女子の結束を男の長門は分かっている。自分が仲のいい友達と同じ競技に出るために、先に約束をしているものなのだ。だから一人と半端になったその枠に、喜んで手を挙げる者などはいない…。いないはずだった…。

「は〜い！先生、私、やりま〜す！仕方ないから、その一枠、私入りま〜す！」

その声に驚いて振り返ったのは、エミルだった。何故ならサツキが先程の約束を無視し、バレーボールの登録に手を挙げたからだ。

「もう、誰かが入らないと、決まらないし話が先に進まないでしょう？私は運動得意だから、どつちでもいいよ〜。私でもいいですか〜？」

英断にクラスメイトから拍手がおきた。

「じゃ、必然的に、残りの女子がサッカーということだ〜！」

長門は、厄介な女子のグループ決めが、簡単に決まったことに安堵していた。そのため、そこに流れた不穏な空気に、彼一人全く気が付いていなかった。

エミルとサツキが同じ競技に出ることは、クラスの皆は百も承知だった。それがいきなり、サツキが違う競技に一人で手を挙げ、エミルを裏切る形になったことに驚いていた。ただそれを表に出すことはタブーのような気がして平静を装っていた。それを感じたからかサツキは

「バレーボール、実はあんまり自信がないんだけど〜、でも、よろしくね！」

と、同じチームに決まった、先程の窓際の女子グループに声をかけた。

「サツキちゃんがいれば心強いよ。入ってくれてありがとう」

妙によそよそしく返事をかえした窓際の女子グループ。

「え〜。期待されても困るけど、頑張ってみるよ！なんなら休み時間一緒に練習する？」

やろう、やろう！と盛り上がるそこにエミルがやって来た。

「サツキ！いったい、どういうつもり！サッカー一緒にやろうって言ったじゃない！」

と、大きな声を上げたエミルだった。

「ごめん。ごめん。あのままじゃ、全然決まりそうになかったから、しょうがないじゃん」

「別にエミルを裏切った訳じゃないよ。ごめんね…許してよ」

感情がそこにはなく、軽く返したような返事をするサツキ。

「しかもよく考えたら、サッカーって、ユウスケ絶対にいるじゃん。アイツと一緒にになるとなかなか面倒だから、私よく考えたらバレーボールの方が良かったんだよ」

サツキは上手く理由をつけた。

「でも…」

エミルが続けて話そうとした言葉を遮って、サツキは窓際の女子グループに話を続けた。

「実は、サッカーは走り回らないといけないし、バレーボールの方が楽かなあつてもあつただよね」

窓際の女子グループもその言葉に同調して：

「実は私達もそう。そう思っつて、こっちに手を挙げたんだあ」

「なんだ、そうだったの。じゃ、一緒に頑張ろうね！」

もう、エミルが言葉を挟む隙はどこにも残っていなかった。

そんなことがあつても、それからのエミルとサツキは、外から見ればカースト女王の仲良し二人組だった。普通に今まで通りの鉄壁な友情にも見える付き合いは続いていた。ただ、敏感な他の女子たちの間では、色々と噂になっていた。

「サツキちゃんさあ。ちよつと可哀想じゃない？」

「え〜！やっぱりあの噂本当だったの？」

「本当だったみたいだよ…。」

「それってエミルちゃんひどくない…？」

「ひどいってもんじゃないよ。自分の親友の好きな人に先に告白するなんて…」

「でも、エミルちゃんも、ずつとタカシ君のことが好きだったんなら仕方ないんじゃない？」

「それが…そうじゃなくてさ…。サツキちゃんが好きだつて知つたから告白したんだつて！」

「え…それって…」

「ただの意地悪だよ。それか、自分が一番可愛いつて証明したかつたんじゃない？」

「まあ、確かに。サツキちゃんも可愛いけれど、エミルちゃんには負けるか…」

「ヒッド〜い（笑）」

あつと言う間にサツキが窓際の女子グループに話した内容は、真実に近い噂話として女子の間で広がつた。それでもエミルに対し、表立ってイヤな態度をとる者はおらず、むしろ機嫌をとる者もいた。長いものには巻かれる…。触らぬ神に祟りなし…。そういつたところだろうか。

ただ頭のいいエミルは、自分が置かれている立場が以前とは微妙に違つてきていることに気が付いていた。だからといつて自分がおかしな動きをすれば、あつと言う間にカースト上位から引きずり降ろされることも分かつていた。何も感じていない…。何も変わっていない…。そう自分に言い聞かせ、サツキとも今まで通り教室で一緒になつて、はしゃいでいた。もちろんサツキも

そのことを感じていたし、それを望んでいたかのようにも思えた。二人の間では、この人気者同士の仲良し二人組のイメージを壊さないように、それを維持することだけが大切に思えていた。

ある日幼馴染のユウスケが部活帰りに突然サツキの家を訪れた。中学の時はよくあったことだが、高校に入学してからは初めてのことだった。ちよつと…と、玄関口では話しにくい様子で、サツキを家の外に呼び出したユウスケ。

「何よ。あんた、私に告白でもするつもり？」

いつもと違う表情のユウスケが、なんだか別人のようで、とても嫌だった。その不安を断ち切るために、サツキはふざけてユウスケのお尻をポンつとたたいた。

「俺の勘違いならそう言ってくれ。お前、エミルちゃんと何かあったのか？」

いつもより大人びて見えるユウスケにサツキは一瞬ドキッとした。

「なんのこと…？エミルとは昨日も一緒に『Starfish』のライブに行ってきたんだから！」

「今度の武道館での初ライブもエミルがチケットとってくれるって約束しているんだから…」

今年になり一躍スターダムにのし上がったそのバンドのライブは、今、女子の間で人気らしい。

「そうじゃなくてさ…。なんていうか、気持ちの中で、エミルちゃんに対してお前が、変な感情を持ってないかって！」

いつもはふざけたことしか言わないユウスケが真剣な顔で話をしている。

「それは、どういうこと？ユウスケは何が言いたいの？」

しまった…ユウスケってたまに、私の心を見抜くことがある。サツキはまたドキッとした。

「いやな…なんて言うか。俺、お前のことずっと見てきたから分かるんだけど。なんか最近のお前、なんか違うの。俺、最近のお前、あんまり好きじゃない…」

「は？なに生意気なこと言ってるの？」

サツキは顔が赤くなっている自分を必死に誤魔化そうとした。それは、ユウスケが告白めいた事を言ったことに加えて、自分の心を見透かされているかのような恥ずかしさがあったからだ。

「俺はさ。だれにでも優しい、能天気な、いつものサツキが好きだからさ。ただそれだけ。それだけが言いたかった。なんでもないならいいや。お前もエミルちゃんといったら株上がるしな。仲良くすんだぞ！妙に、女、出してくんじゃねえぞ！」

そう言って自転車で去っていくユウスケを、ぼんやりと彼の姿が見えなくなるまで、サツキはずっと目で追っていた。

担任の長門は大きく息を吸い込んだ。夏休み明け。徹夜で課題を仕上げた生徒と同じく、教師の長門もいつもの調子が出ない。それでも、生徒に求められている明るい長門先生は溜め息なんてついていられない。気持ちを切り替えて、さあ、いつもの笑顔で…。と、自分に言い聞かせ、勢いよく教室の扉を開けた。

「お。皆、元気にしてたかあ？」

ありきたりのセリフしか口からは出てこない。

「元気なわけないじゃないですか！先生、課題多すぎです！」

「夏休み、短すぎです！」

生徒が口々に長門の言葉に反応した。大概、この学校の夏休み明けの生徒の愚痴はこれなんだよな…。いつも同じ…。長門は冷たくあしらう気持ちを表には出さない。

「まあ、そう言うなよ。でもなんだかんと言ったって、それなりに楽しかっただろう？」

こう言えば、返ってくる返事は分かっていた。

「先生、僕、家族と一緒に、ハワイに行ってきました！」

「先生、私、短期留学していました！」

「先生、俺、部活しかやってませくん！」

はい、はい、お決まりのね…と、長門はこうやって心の中で毒づいている自分自身を滑稽だと思っていた。表向きは面倒見がいい優しい先生？爽やかで（32歳独身。顔は上の下でちよいイケメン。身長180センチ）、授業は分かりやすいとの評判。そしてそれなりに生徒からの人望もあった。そんな先生を演じている自分っていったい何者なんだろう？…自分でも時々分からなくなる時があった。

お決まりの夏休み明けの会話を、数分生徒達とした後だった。

「すみません。遅刻しました！」

めずらしく、早川エミルが遅刻をしてきた。いや、めずらしくではない。初めてだ。

「おう。早く席に座れ。もしかして、徹夜か？」

冗談を言って場を和ませようとしたが、長門が思った反応がクラスの中にはなかった。不思議にも思ったが、まあそうか。早川をイジれるつわものは、このクラスにはいないか…。そんな風に勝手に納得した。

その合点が間違っていたことに長門はすぐに気が付いた。クラスの中にいた早川エミル。長門から見ても、さらさらとしていた彼女を取り巻く空気が以前とは何か違うのだ。親友と思われる市川サツキと、今まで通り一緒に行動はしているのだが、二人の関係が入れ替わったように見えた。親友とはいっても、二人の立場は対等ではなかった。どちらかと言うと、早川エミルに、市川サツキが付いているイメージだった。いつでも中心は早川エミル。クラスの中でもそれは周知されていた。だが明らかにここ最近では、クラスを引っ張っているのは市川サツキであった。

女生徒のごたごたに、首を突っ込んでいいことはない。しかも今の状況は、いじめでもなんでもない。ちゃんと早川エミルには友達もいるし、また仲良く付き合っている彼氏もいる。問題など何もない…。そんなことよりも、夏休み前の模試結果が気になる長門であった。クラス平均点が、今までは学年で上位であった長門のクラスが、急降下していたのだ。これは大問題だ。学年主任のクラスがこんな調子では示しつかない。原因を探ろうと個人のデータを見てみると、そこにも早川エミルが絡んでいた。学校の定期テストでも、外部模試結果も、必ず校内10位以内の上位層に名を連ねていた早川エミルの名がないのだ。見たこともない層に埋もれた彼女の名

はいったい何を意味するものなのか…。そこには深い闇があるような、いいしれない悪い予感がして、長門はいったん、強制的に自分の思考を停止することにした。

長門アキヨシ。意外に思われることが多いあるが、東北出身。田舎の学校では目立つ存在だった。その地域では一番の進学校に通い、部活はバスケットボールに励んだ。父親は、家業を営んでおり、母親は小学校の教師であった。狭い地域で、学校の先生の長男としての視線を浴びて育ったアキヨシは、いつしか息苦しさを感じるようになっていった。勉強ができて当たり前。家でお母さんにいっぱい勉強を教えてもらっているんだろ？。アキヨシ君はスゴくデキる子。地域のボランティア活動にもお母さんと一緒に参加して素晴らしい。あんな息子が欲しいわ…。地域の母親は口々にそう言った。それに比べて、弟のミツルは自由人だった。どちらかというと、父親にかわいがられていたミツルは、好奇心のかたまりだった。勉強はそれほどデキはしなかったが、虫博士の異名を持ち、学校の自由研究では、虫の生態を根気よく調べ、大人顔負けのレポートを提出し皆を驚かせた。どちらかというと、母親にかわいがられたアキヨシは、そんなミツルを尻目に勉強にのめり込んだ。

母親の期待に応えて、都会の国立大学に合格したときは、大騒ぎだった。進学校に通っていたとはいえ、地元の国立大学ではなく、超難関の国立大学に合格したことは、地域、学校あげての快挙でもあった。涙を流して喜ぶ母親に、「お母さんのおかげだよ」と声をかけながらも、冷めた感情を抱いていたアキヨシ。それは長い18年にも及ぶ母親の呪縛から解き放たれる武者震いでもあった。決して母親のために勉強したわけではない。一刻も早く、この狭い田舎から離れるため。そして自分の世界を手に入れるための手段が大学受験であったのだ。

ただ、結果として母親の呪縛からは解き放たれず、自分は今、こうやって教師をやっている。そしてそつなく仕事をこなし、進学校の学年主任まで任されるようになった。逆らえない運命ならば、その人生を上手く乗りこなせばいい。そうギアチェンジをして、長門はいい先生としての自分を演じて暮らすことにした。

早川エミルの件は、長門が目逸らしていても、逸らしきれなくなっていた。回りの先生連中がざわつき始めたのだ。もちろんクラスの中での異変ではなく、成績上の問題についてだった。まずは学年主任でもあり、担任の長門が、早川エミルと面談の時間を持つことになった。なるべく周囲にはこの面談が行われていることを察知されないように、部活動が一斉に休みになる水曜日の放課後に行われた。(進学校であるこの高校では、平日週一回、水曜日固定で休養日とし、完全下校としている。自宅学習を促されているが、半数以上の生徒は自由に青春を謳歌している)

いつもの教室が、長門とエミルの二人だけになると、落ち着かないほど広く感じた。「どこで話す？」

さほど大きな声を発したわけではなかったが思った以上に響く声に焦る長門。

「ここがいいです」

とエミルが選んだのは、教室の一番後ろの、窓際の席だった。長門もここが一番落ちつくだろうと同意した。いつもは窓の外から、部活に励む生徒たちの声が聞こえてくるのだが、今日はそれもない。大きな世界から取り残された二人がそこに、かすかに存在しているかのようだった。整頓され、すべてが正面にきつちりと向いている机を一つ、反対の後ろ向きに方向を変え、二つの机が向かい合わせになるような形で二人は席に着いた。

長門はこういうシチュエーションを今まで避けてきた。生徒と二人きりで面と向かえば、どんな鈍感な生徒であっても、長門の化けの皮に気が付くのではないかという不安があったからだ。だがそれはエミルも同じであった。自分の心の闇の部分など誰にも知られたくない。闇があることを知られたくない。こうして二人の攻防は幕を開けた。

先にエミルが先制パンチをくらわした。

「長門先生。すごく今、ダル〜って思っているでしょ？」

「早川〜。俺を巻き込むなよ〜って」

あまりにも凶暴すぎて長門はすぐに言葉が出てこない。

「な、なにを言っているんだ。あんまり変なこと言うなよ」

「この相談日誌に今話していること一言一句逃さず書かなきゃいけないんだ。勘弁してくれよ」

そう言いながら長門は、おもむろにスマホを取り出した。

「隠れての録音はルール違反だと思ってな。悪いけど先生、大事なこと聞き逃すとまずいから、教頭先生には内緒なんだけど、会話を録音させてもらってもいいかな」

長門は下手に出て実は楽をしようと考えていた。録音さえしておけば、今それほどちゃんと話を聞かなくても困った時に聞き直して、相談日誌を上手く書けばいいと企んでいたからだ。

「構わないですよ。どうせたいした話にもならないと思うし…」

「ただ…ある女子高生の告白…とかいって、ネットに拡散とかさせないでくださいよ」

エミルは余裕からなのか、そんな冗談を軽く言った。

「約束する。この録音した内容は絶対に口外しない」

そう言って長門は慣れた手つきでスマホの録音機能を作動させた。

長門が『フジイさん』から急いで学校に到着した時、すでに職員室は慌ただしくなっていた。乱雑なその部屋が一層荒れて見えた。いつもはのんびり椅子に腰かけている年配の教師でさえ、席を立ち、意味もなく右往左往と小さな体を動かしていた。あちらこちらの電話が鳴り、その対応に追われる者、詰め寄る生徒をなだめて教室に戻す者。

「あっ！長門先生きた！早川エミルとの相談日誌どこですか？警察に提出しなくちゃいけないんですよ」

「ちゃんと記録してありますよね？早川本人が学校でのいじめはなかったって、その時点で言っていたんですよ？」

教頭が、ずり落ちる眼鏡を何度も片手で元に戻しながら、長門を大きな声で遠くから手招きをした。長門はこの光景を目にした時、言いようもない不快感と、とてつもなく大きな違和感しかなかった。生徒一人が命を落としたというのに、この空間にいる大人は誰一人悲しんでいない。無論涙を流すものもない。そして何よりそのうちの一人が紛れもなく自分自身だということが恐ろしかった。

なぜなら長門がまず考えたのは保身だったからだ。理由はどうであれ、自分が担任していた生徒が自殺？した。そんな汚点は自分の人生で考えもよらなかった。教頭や校長にこれから問い詰められ話を聞かれるのか。もしかすると、責任は全て自分に負わされるのではなからうか。そして警察からの取り調べを受けるのだろうか？

鍵付きの棚にちゃんと保管されていた相談日誌。それを手に取り長門はまず自分で確認した。怪しいフレーズを書き込んでいないか。自殺を思わせる要素となるものは、すべて解決済みになっているか。自分が早川にかけた言葉はちゃんと教師らしかったか。それは大丈夫なはずであった。この日誌に書き込むときに、自分が何度も何度も確認したことだ。この日誌は形式上、教師が生徒から相談を受けた際、その会話内容を書き込む。ただ、とてもプライベートな内容を多く含むものであるから、それを他の教師が読み、確認し、承認するわけではない。何もなければそのまま誰の目に触れるものではなく、ただページが重ねられ、この鍵付きの棚に保管されるだけのものであった。それでも、表向き完璧な先生であり続ける長門は、もしこのページが誰かの目にふれるようなことがあったとしても、なんの問題も無いように、無難なレポートに仕上げた。早川エミル自身も会話のなかで「さすがに、この部分はその日誌になんて書かないでね」と言っていたこともあり、深い話は何も書かれていない。深い話：？長門は自分でその言葉に引っかけりを感じた。そんな深い話なんて、もともとしていなかったよな：自問自答する。

「成績が落ち出したのは本当に自分の限界が見えてきたただけだし、これから大学受験に向けて、できる限りの努力はするつもりだよ」

エミルの柔らかい笑顔が頭をよぎる。

「友達関係…。まあ男の長門先生には微妙な女心は分かんないだろうけど、色々あっても女の親友って案外男の友情の絆より、もつと深いトコで繋がっているんだよね」

大人びた表情で語るエミルの言葉には説得力があった。それならなぜ自殺？なんてしたんだ。お前は大人で、世の中のこともなんでも分かっている、上手く乗りこなしていたんじゃないのか？

「先生は人の悪意って見えたりするの？」

エミルがふと言った言葉を思い出した。もちろんそんな文言は、面談日誌には書かれていない。

「先生は見えない…というか、見ないようにしているかもな」

たぶん自分はそう答えた。

「どういう意味？」

エミルがめずらしく真顔で聞いてきたのを覚えている。

「なんていうか…悪意って、自分自身が悪意ってものを知らないと、そもそも人の悪意って認識できないだろう？」

エミルが続きを促したため、長門は続けた。

「先生は弱い人間だから、どこかでいい人でありたいんだろうな。だから、これってもしかして意地悪をされているのか？嫌み言われているのか？なんて疑いたくないんだな。きつと気のせいだ。そんなことあの人がするわけない。そして自分はそんなことをされる人間じゃないって」

「私も同じかも…」

いつもとは違う子供じみた表情で、エミルが言葉を発したその時を長門は今、思い出した。早川エミルはあの一瞬、自分の本音を話していたのだ。

どんどん自分の脳裏に映し出される、エミルとの面談での様子。長門は手にした面談日誌を強い力で握りつぶした。このノートになんて、本当のことは何も書かれていない。いや違う。俺が書かなかったんだ。これを早川エミルの気持ちとして学校や警察に差し出していいものなのか…。長門は自分自身に怒りを覚えた。

「録音してもいいけれど、ネットとかに拡散させないでいね」

あっ！そうだ。ボイスレコーダーだ。俺は全ての会話を録音していたんだ。

「約束する。録音した内容は絶対に口外しない」

でも、俺は約束したんだ…。口外しないと…。そうやって自分の脳裏に残っているエミルとの会話を必死にたどっていた長門は、近づく教頭に気づくのが少し遅かった。

「長門先生！それですよ。面談日誌…早く渡してください」

目の前に来た教頭が長門の手から、するりと面談日誌を奪っていった。

警察は、遺書などは見つからないものの、学校で記録されていた面談日誌の内容から、学業の伸び悩みや、友人関係の悩みが重なり、思い悩んだ結果16歳の早川エミルは自ら命を絶つたと結論づけた。簡単に、思春期特有の悩み…というカテゴリーで片づけられてしまったのだ。

現場を詳しく調べると、手すりを一度、エミルが外側から握った形跡が残っていたらしい。もしかすると、一度思い留まったのかもしれない…。それでも不審な点は見つからず、自殺という見解は変わらなかった。

母親の早川咲江は自分を責めていた。警察はああいう風に結論づけたが、エミルを死に追いやったのは母親の自分だと確信していた。エミルがいなくなった広い家の中で、毎日毎日、どうしてエミルが死ななければならなかったのかを考え続けた。

そして自分の人生とエミルの人生は同じ道の上にあるものだと思いつけた自分の教育や育児の過ちだと気が付いた。娘のエミルに対し、あなたの将来のため…と言いつけさせたことは、全てエミルが言った通り自分のためだったのかもしれないと考えた。自分の評価は娘の評価で決まる。娘は自分の制作した傑作であり、その創作者は称えられる存在でいられると勘違いをしていた。そのため、娘の意思などにいつさい気にとめることもなく、自分の考えのまま娘を育ててしまった。そうやって、娘の可能性を母親自らが奪い、狭い世界に閉じ込めてしまっていたのだと。

エミルを失ってから思い出すのはエミルの笑顔ばかり。本当にかわいい娘だった。心から愛していた。勉強なんてできなくても、いい子じゃなくてもいい。ずっとエミルの成長を見ていたかった。自分には一人しか子供は授からなかったが、もし兄弟がいても、エミル以上に愛せるか自信がないくらいエミルを愛していた。そんな大切な娘のエミルを、窮屈な場所に閉じ込めたため、そこから逃げだそうとして娘は死を選んだのだ。罪があるとすれば、それは紛れもなく自分だ…と。

サツキはエミルの死後、ずっと自分を責めていた。エミルを死に追いやったのは親友の自分だと確信していた。自分は目に見えないいじめをエミルにしていた。わざと噂になるようにエミルの悪口をまいて、自分は素知らぬ顔で親友をやっていた。本当はエミルのことが大好きで、ずっと友達でいたかったのに、タカシ君のことに關して、どうしてもエミルを許せなかった。と、いうのは半分口実であって実は半分違う。確かにエミルはサツキがタカシ君のことが好きだと知ってから告白をしている。どうしてそんなことをしたのはいまだにサツキにも理由は分からない。付き合ってからそれほどそれほどタカシ君のことを好きだったようにも見えなかった。だからそれは自分への当てつけだと思った。だから悔しかった。憎かった。でもそれと同時に、もし自分が先に告白していても上手くいった保障はない。だって人気者のタカシくんだから。エミルくらい可愛

くなくつちや釣り合わないことも分かっていた。

嫉妬だ。自分よりどう見ても可愛いエミルはどんな色んなものを手に入れていく。自分はその横にいてただ笑っているだけ。エミルが羨ましかった。そしていつでも完璧なエミルを壊したかった。だから初めて見えたエミルの悪意に乗った。そこにエミルをいじめる理由を見出したのだ。とつてもずるいやり方で。エミルを悪者にして私は被害者になって…。そしてそんなエミルと変わらず仲良くしている自分の株を上げ、エミルを自分以外の誰かから傷つけさせた…。ヒドいことをした。エミルがいなくなつて、自分がこんなにもエミルのことが好きだったことに気が付いた。憧れだったのかもしれない。最悪だ。大切な、こんなにも自分の心を占領していた親友を死なせてしまったのだ。罪があるとするとするなら、それは紛れもなく自分だ…と。

担任の長門は、自分を責めていた。早川エミルを死から救えなかったのは自分だと確信していた。それはエミルとの間で何度も行われた面談時に、録音していた音声を再度聞き直したことでハッキリした。俺は何てことをしてしまったのだろう。

今、こうなつてみて、その面談時の音声を聞くと、あふれ出る彼女の痛みが聞こえてくる。その時は表情に誤魔化されていたが、彼女は大きな闇を二つ抱えていたことを告白しているじゃないか…。何故、俺は気が付かなかった？何故、今どきの生徒の悩みだと軽く流してしまった。これは、この音声は、ある意味早川エミルの懺悔の告白ではないか…。

長門は自分自身が、いい先生の仮面をかぶり続け、そつなく全てのことをこなしていたことを恥じた。感情に波風立てることを嫌い、いつも笑顔でいた。生徒には深く関わらない。問題は、掘り下げず、軽いところで、救えたかのように、生徒の感情をすり替えた。権力のある先生や、PTA関係の父兄には丁寧な態度で接する。クラスの中でカースト上位にいる生徒は、いざという時は使えるので、つながっておく。そんな風にして自分のことだけを考えて生きていた。先生という職業にプライドなんて持っていなかった。たまたま就職した会社の中で、先生という部署にあてがわれただけ。そんな感覚での仕事だった。生徒なんて順番にベルトコンベアーで運ばれてくる未完成な製品であつて、自分の目の前での作業が一つ二つ手が回らなくても、次の誰かが何とかしてくれる。目の前を通り過ぎた製品など気にしていられない。どんどん、どんどん、ベルトコンベアーで次の未完成な製品が運ばれてくるのだから。立ち止まり、時間をとる暇などない。これでいい。なるべく早く、できる限りの努力でいいんだ。

そうやってきた長門が初めて立ち止まった。このまま、早川エミルの気持ちを闇に葬つてはい

けない。彼女は遺書を残してしない。もしかすると、衝動にかられてとっさに自殺してしまったのかもしれない。遺書を書く時間もなかったのだろうか。あるいは、この録音された音声に思いを託したのか…。うぬぼれかもしれないが、俺が自分の気持ちを代弁してくれるとでも思ったのか…。それならば、早川エミルの担任として、最後の傍聴者として、その願いを叶えてやらねばならない…。そんな思いに長門は至っていた。

長門はブラックのコーヒーの缶を片手に、『フジイさん』のレジにいた。会計を済ますと、なにげに、その女主人に話しかけた。

「おばちゃん。あそこの張り紙って、まだ有効なの？」

それは店の暗闇側の一番奥の壁に貼ってあった、はがれかけの古い張り紙だった。

「なんのことかね？」

女主人は、長門の指さす方を見た。

「あくあれかい。いやいや長門先生。それはないでしょ。当の昔に、お習字教室なんてやめてしまったよ」

女主人が目細めて笑う。

「いや、もう一つの方…」

長門はづかづかと、暗闇の店の奥に入り、一枚の半紙を直接指さした。

『筆耕承ります』

もうその半紙は白かったことも忘れる程に、黄色く変色していた。

「これって、賞状とかの手書きですよ？きれいな字で書かれている…」

長門は子供がとっておきのお願いを親にする時のように、女主人に真っ直ぐ視線を合わせた。

「それは、そうだけ…。もうそれもやっていないよ。」

女主人は子供を諭すような表情で、ごめんね…と長門に伝えた。

「おばちゃんは、誰かの字に似せて字を書けたりするの？」

食い下がる長門。

「似せる？字をかい？」

長門がへんなことを言い出したので、女主人は反応した。

「そりゃ、どうだろうね…。そんなことやったこともないから…」

長門は今、自分の考えている計画を正直に女主人に話した。はじめは、驚いていた女主人だったが、途中からは涙を流してその話を聞いていた。そして、ゆっくりとうなずいた。長門がいったん学校へ戻っている間に女主人は物思いにふけていた。そしておもむろに、机の上に置かれたフォトフレームを手に取り話しかけた。

「母さん、仕事受けようと思うよ。だって、母さんも同じように、あなたの気持ちが知りたかったから…」

「分からないまま残されるって辛いんだよ」

「ずっと答えが分からないままって、苦しいんだよ」
女主人が優しく撫でるそのフォトフレームには『フジイさん』のお店の前に立つ、女主人の家族三人の写真が入っていた。

※

『お母さん。急に思い立って手紙を書いてみたよ。手紙じゃなきゃ、伝えられそうにないからね。最近ずっとケンカばかりだよ。こんなエミルになっちゃって幻滅でしょ？勉強もできないし、反抗ばかりするし、全然お母さんの理想の娘じゃないでしょ？エミルだってこんな自分、理想の自分じゃない。本当は勉強も頑張りたいのに、本当はお母さんにも優しくしたいのに…でも、イライラしちゃう。なんで分からないけれど腹が立ってしまう。理由はあるようで、でも、それもすべて違うようで…。だから、気付かない間に自分の気持ちの中で、もう一人の自分ができちゃった。こんな風に自分がなってしまった答えが欲しくて、もう一人のエミルに悪い心を担当させた。そしてその子は、すべてをお母さんのせいにすることにしたの。本気でお母さんが憎かったし、本気で消えてくれとも思ってた。息苦しくて、道の先が見えなくて、真っ暗なのは母さんが邪魔をしているせいだと思いついていた。

でも気づいたんだ。本当のエミルはこの子が嫌い。お母さんを悪く言うこのエミルが嫌いだった。だから、もう消えてって何度も言ったの。だってエミル自身が作ったもう一人のエミルだから、エミルが頼めばすぐに消えると思ってた。でも気が付いたら、悪いエミルの方がたくさんエミルの中を占領していて、消えてくれるどころか、本当のエミルが消えそうになっていた。いやだよ。本当のエミルが全部消えてしまったら、私はどうなるの？私は私じゃなくなるじゃない？

本当のエミルが残っている間に、いい子のエミルがまだ存在している間に、早川エミル自身を終わらせたほうがいいのかな？そんなことをちょっと考えたりもした。なくんてね。真面目か、私は（笑）』

※

これは夏休みの課題で提出された早川エミルのワークに挟まっていたルーズリーフに書かれた手紙だった。長門は夏休み明け、忙しきにかまけて、中身を確認せずに表紙にハンコを押すだけの作業を行い、ずっと生徒に返すのを忘れていた。それを担任が終わる最後（三月）になって、

あわてて返した時に偶然母親が見つけたものであった。もちろん生前のエミルが書いたものであった。最後は軽いタッチで書かれていて、なんとなくその時の感情を勢いで書いたようにも思われるが、母親の咲江はそれを見つけた時、声を上げて嗚咽した。久々に見るエミルの字。お習字を習っていてきれいな文字ではあるが、愛らしいクセのある字。その手紙は、母の知らなかった娘エミルの揺れ動く心情が綴られていた。娘からの最後の大切な手紙。咲江はその手紙を胸に抱きながらこう言った。

「どんなエミルちゃんでも生きていてほしかった。どんなエミルちゃんでも心から愛していた。どうしてそんな簡単なことあなたに伝えることができなかったのだろう…。ごめんね…本当にごめんね…。会いたい。エミルちゃんに会って抱きしめたい…」

※

『サツキ。なんだか最近ギスギスしちゃうね。一番の親友なのに、一番遠く感じるみたいなの…。でもね、理由は分かっているんだ。タカシ君のことでしょ？私が原因なんですよ。実はね…正直に言うね。サツキも気が付いていると思うけれど、私、別に、タカシ君のことそんなに好きじゃないんだよ。それなのに付き合っている。これがサツキの怒っている原因でしょ？だから、なんとなくイヤな感じに女子の子どもたちを誘導してたでしょ？私いじめられてんの？って思ったもん（笑）でも、それは仕方ないことだって思っている。だって悪いことしていたのはエミルの方だもん。』

なんでタカシ君と好きでもないのに告白して付き合っていたかという、サツキがうらやましかったからなんだよね。だからサツキにも私と同じ思いをさせてやれ…って思っていて意地悪しちゃった。絶対サツキは気が付いていないと思うけれど、実は、私、ユウスケ君のことが好きなんだよね。本当に大好き。でも、告白するとかそんなこと以前に、ユウスケ君にはサツキがいるでしょ？付き合っていないってサツキは言うけれど、私から言わせてもらえば、幼馴染って最強だから。私なんて入り込めないよ。しかもユウスケ君はサツキのこと好きなのバレバレだし…。ハッキリ言ってお私、今までフラれたことなんてないよ。私が好きになれば、みんな私のこと好きになってくれたもん。（↑相当ヤな奴だね私（笑））でも、ユウスケ君はそれ以前にもうムリじゃん。だから、サツキが好きなタカシ君を取っちゃった。

でもそうやっているうちに、タカシ君の優しさが辛くなってきたの。すっごく優しいの。サツキが好きになった気持ち分かる気がする。タカシ君といると自分が人として汚れた人間みたいに感じて辛いなの。だったら別れたらいいのに、どこかでタカシ君にこんな自分を知られたくない自分もいるの。だから別れられなかった。

そして、優しいサツキに隠れいじめみたいなことやらせてしまった自分も嫌になった。そりゃあはじめは、最悪！って思ったよ。サツキ、女の腐ったみたいなことするなあって。でもよくよ

く考えたなら、私がまいた種なんだよね。最初からかわいくさあ、サツキに、実はユウスケ君が好きなんだよね…。上手くいくように手伝ってつて言えればよかった。

こんな私が消えればみんなが幸せになるんじゃないかと思った。今で止めておけば、最悪な私ができることもないしね。こんな私知られたくない。こんな私、自分自身が許せない。あくど何か、エミルのこと誰も知らない場所に行きたいなあ。消えたいなあ。なんてね。暇だから変なこと書きちゃった…。(笑)』

※

この手紙は一年二組の教室の荷物ロッカーの隙間から学年最後の掃除の時に見つかった。「スチール製のロッカーも全部動かして掃除するんだぞ！」という担任の長門の指示によってクラスの男子たちがそれを動かした時に、早川エミルのノートが隙間から出てきた。そのノートの中に挟まっていたものだった。本気で市川サツキに渡すつもりで書いたものは分からない。消えたい…など遺書めいた言葉も含まれているが、これは親友と仲直りしようと生前早川エミルが書いたものだと思われた。サツキは「これ、エミルの字だ。間違いなくエミルの手紙だあ」と声を上げて泣きながらその手紙を胸に抱いた。そしてサツキは少しの笑みを浮かべこう言った。「なんで、エミルが、ユウスケなんだよ。バカだなく。私に嫉妬だなんて…。エミルは私の憧れだったんだよ…。なんでエミル、言ってくれなかったの？なんで私、言えなかったんだろう？ごめんね、本当にごめんね…。もう一度エミルに会いたいよ…。」

『長らくご愛顧いただきました当店は、今月をもって閉店することとなりました』

県立泉川高校の真正面にある雑貨店。通称『フジイさん』のレジ台に、真っ白な半紙に書かれたお知らせが張り出されていた。その字はどことなく、愛嬌のある優しい文字で書かれていた。

くエピソード

『プラザ泉川』にこの春、新しくできたカフェは、新しもの好きの女子高生で連日満席だった。特に屋根のないオープンテラスは大人気だった。

「この曲カッコいいよね。」

オープンテラスの中でも特等席のテーブルに座るショートカットの似合う女子高生が流れてきた曲に耳を傾けた。すると同じテーブルを囲み向かいに座る黒髪の似合う女子高生が

「曲もカッコいいし、なんだって、顔がいけてるよね。」

そうそう、と言わんばかりに前のめりになり、続けてこう聞いた。

「でも、なんでバンド名が『star fish』なの？」

ショートカットの女子高生が自慢げに答えた。

「え〜！知らないの〜？あのね…ボーカルの星野さんと、ギターの魚崎さんが、高校生の時に組んでいたバンドの名前をそのままつけたらしいよ」

「星野の星と魚崎の魚で、『star fish』なんだって」

黒髪の女子高生がそれを聞いて、カバンから取り出したノートに何やら書きだした。

「じゃあ、さあ、私たちがバンドを組んだら…」

「『three tree』だね」

ショートカットの女子高生は

「なにそれ〜、変な名前。しかもスペルやっこしいよ」

口を大きく開けて豪快に笑った。

「だって、三宅の三と、木田の木で『three tree』…カッコいいじゃん！」

二人がノート上であーでもないこーでもないで、たわいもない話をしていると、少し強めの春の風が吹いた。ページがめくれそうになるのを、二人の手が同時に押さえた。そこに、どこからともなく舞ってきた桜の花びらが、ひらりひらりと落ちてきた。二人は同時に上を見上げた。その視界には大きく広がる空が、悠然とそこにあった。

するとその視線の先に花びらではないものが、目に入ってきた。ふわふわとゆっくりとテラスの芝にそれは落ちてきた。汚れた封筒。今の風でどこからか舞ってきたのか…。二人は目で合図しながらその封筒を拾ってみることにした。しばらくの間、雨風にさらされていたのだろう。もう外側の封筒はもろく、すぐに破れてしまった。それでも中に入っていたそれはすぐにチケットだということが分かった。

「えっ？これって、もうすぐある『star fish』の武道館のチケットじゃん！すぐにソールドアウトした幻のチケットじゃん！」

二人が声を揃えて叫んだ。

「なんで？どういうこと？これは神様が私達にプレゼントしてくれたってこと？」

封筒の中には二枚分のチケットが入っていた。ショートカットの女子高生が興奮ぎみに黒髪の女子高生の手を握った。

「プレゼントなわけないじゃん」

黒髪の女子高生が我に返り冷静に論じた。

「誰かが落としたんだろね。きつと今頃泣いてるよ。でも、コレってどこから降って来た？」

二人は空を見上げた。そして見上げた姿勢のままもう少し体を逸らしてみると、屋上のコンクリートが見えた。

「屋上か？きつと屋上から今の風で飛ばされたんだね。なくした子、今、絶対に焦ってるよ。持って行ってあげようよ」

二人が屋上に着いた時には、もう誰もそこにはいなかった。二人は首をかしげながら、もう一度そのチケットをまじまじと見た。考えれば分かることだった。その封筒の劣化具合から見ても、もつと前に持ち主はこれを落としたに違いなかった。だったら今、なぜ、このチケットが降って来たのか…という疑問が残る。二人は考えた。

「想像だけど、もしかしたらこの持ち主さあ、チケットが取れてすつごく嬉しかったんじゃない？それで、屋上で喜びをかみしめてたら…」

黒髪の女子高生が、ゆっくりと頷きながら仮説をたてた。そして二人はスーッと息を吸い

「風で飛ばされちゃったとか！」

ひらめいた！とばかりに二人は声を揃えて叫んだ。

「で、どっかに挟まってしまつて、ずっとその場所に留まっていたんじゃない？それで偶然今の風で落ちてきたのかも！」

ショートカットの女子高生が早口で結論付けた。

「落とし主は、必死でその時探しただろうね…。屋上から落ちたであろう、このチケットを…」

「あ、そうだ。今のチケットつて、転売防止のためにチケットに買った人の名前が書かれてあるんだよ」

黒髪の女子高生が探偵のようにドヤ顔でチケットを見た。そこからは小さな文字で書かれた『早川 エミル様』、『市川 サツキ様』という名前がかすかに読み取れた。二人は目を合わせ、これで持ち主が見つかるかもしれない…と目を輝かせた。

「見て！11月10日にこの『プラザ泉川』のチケットセンターで発券しているよ」

「確か、こここの三階にあったよね。そこに持っていけば、落とし主に連絡とつてくれるかも！」

二人は同時に重く錆びた屋上の扉を大きく開け、希望に満ちて駆けだしたのだった。そしてその誰もいなくなった屋上を、オレンジ色の春の夕日が、優しく包み込んでいた。